

---

# 卒業

桜井進

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

卒業

### 【Nコード】

N9476T

### 【作者名】

桜井進

### 【あらすじ】

恋愛小説。純文学風かも。

空を見た。雲行きが怪しい。雨が降ってきそうだ。傘はない。合羽もない。おそらく僕は濡れになるに違いない。でも、僕は雨が嫌いじゃあない。世界中に付着した悪い部分を洗い流してくれる。そんな気がするからだ。

近所のスーパーに入る。レジには高校時代の同級生がいた。どう？ 仕事頑張ってる？ 当たり障りのない問いかけ。僕も簡単な作り笑顔を浮かべて答える。頑張ってるよ。すぐに途切れそうな会話をして、僕はすぐその場から立ち去ろうとした。

「そう言えば美紀、結婚したらしいよ」

「そっか」

僕は無関心を装って答える。そして、スーパーを出た。外はもう小雨が降っていた。雨は次第に強くなり、眼前の視界が悪くなる。髪は滴り、上着は体にくっつき、シューズは水を吸って重くなった。

僕は回想した。高校時代。良い思い出も悪い思い出もない。平凡。自分が傷つくのが怖くて当たり前障りのない存在に撤していた。それが本来の自分なのか、作られた自分なのかはわからない。ただ、僕がたくさんいたような気がした。友達の前でふざける僕。先生の問

い掛けに答える僕。部活の先輩に気を遣う僕。家族と食事をしながら談笑する僕。すべて僕なのだけど、すべてが別人のように感じた。その違和感が僕の中に溶け込み、空中分解して、僕はさらに分離されていくようだった。

僕はひとりの女の子が気になっていた。名前は美紀。あのレジ打ちの同級生が結婚報告をしてくれた女性のことだ。彼女は普通だった。平凡を絵に書いたような僕が言うのもなんだが、たいして美人でもないどこの高校にもひとりはある女子だった。でも、なぜか気になった。枯れ木に付いている紅葉のように、誰にも気付かれずに魅力を発していた。僕は知っていた。彼女は美しい。でも、詳しくは形容できない。形容できないからこそ誰にも知られることなく、僕の眼に止まるのを待っていたのかもしれない。

しかし、僕はアクションを起こさなかった。告白するべきなのか悩んだのだ。確かに僕は根性もないし、男らしくもない。だが、アクションを起こさなかった一番の要因は、自分の中で沸き立つ感情が確実に恋なのか判断できかねたからだ。きれいだ、美しい、美人だ。外見や内面が美しいのは僕も判断できる。でも、その時浮かんだ感情が本物の恋なのだろうか？ 今だに僕はわからない。

僕はただただ時を過ごした。身の入らない学問や本気になれない部活に集中したふりをしてやり過ごした。しかし、彼女は消えなかった。僕はある日、彼女を呼び出した。

「君を好きかもしれない」

「単刀直入に言った。」

「好きかもしれないの？」

彼女は難しそうな顔を浮かべて答えた。

「うん」

「确实じゃあないの？」

「わかんないんだ」

「好きかどうか？」

「そう」

「じゃああなたはどうしたいの？」

「君と話がしたい」

「じゃあ話を聞かせて」

そう言われてから数分で会話が途切れた。互いに自分達のことを説明したらもう話すことがなかった。今流行っている映画。ジャニーズの が主演のドラマ。少年ジャンプ。同級生の と が付き合っている。国語の教師は歯が汚くて息が臭い。そんな下らない話題が山ほどあるのに僕の目の前には無言の荒野が広がっている。

「いつしよに帰ろっ」

彼女は言った。僕は彼女からちゃんとした返事を聞けなかった。

5

それから二カ月後。僕の部屋でセックスをした。痛くない？と僕は聞いた。ううん、痛くない、と彼女は答えた。セックスは最初不気味だった。女性の性器は気持ち悪く、なんだかグロテスクに見えた。この穴に入れば取り返しのつかないことになる。好奇心と破裂しそうな性欲の隙間に、わずかな不安が入り込んだ。でも、僕は入れた。彼女のアソコから血は出なかった。

「私、初めてじゃあないの」

彼女は少し神妙な面持ちで答えた。女子は進んでいる。

「そうなんだ」

僕はあまり散策しなかった。誰と初体験を済ませたのか問いただしたところで僕にも彼女にもプラスにならない。残るのは溝だけ。そんなのいやだ。

「誰としたか、聞かないの？」

「付き合う前のことを言及したって仕方ないよ」

すると彼女はキスをしてきた。その前に初めてのキスは済ませておいたが、あの時のキスより鮮明に思い出せない。初めてのキスは儀礼的なような気がした。付き合ったのだからキスぐらいはしないと。そんな感じだったのだけは覚えている。あの時のキス。儀礼的な精神より崇高で、彼女の自発に富んでいた。お返しとばかりに僕も自発的にキスをした。

僕らは初体験（僕だけの場合だけ）を終えたあとさらに親しくなった。いつも一緒とまではいかないまでも、冷めた夫婦よりは長くいた。でも、僕はまだ恋に半信半疑だった。彼女と一緒にいたいと思う僕は本当の僕なのだろうか？ 分離した僕の一部がそう思っているだけで、心のなかにいる他の僕は彼女を性の対象としか見ていなくて、溜まった性欲を吐き出しているだけに過ぎない。そん

な一抹の不安があった。不安は僕がいろいろなことに気を逸らしているうちに大きくなり、次第に彼女が怖くなった。僕は嫌われる。いや、すでに嫌われているに違いない。ガツガツしてて獣のように思われているかもしれない。嫌だ。でも、セックスはしたい。

ある日、僕らは誰もいなくなった教室で話をした。最初の頃は話せなかつたいろいろな話題が徐々に出るようになり、無言の荒野は消えていた。昨日、放送していたドラマの話を終えたとき、ねえ、と彼女が言った。

「話があるの」

「なに？」

「遠くに行きたい」

彼女はあまりわがママを言わない。でも、その言葉には懇願が含まれていた。

「遠く？ 急になんで」

「遠くで暮らしたい。いっしょにいいたい」

彼女はじつと僕を見た。僕は話の展開が理解できなかった。突発的。彼女より精神年齢の低い僕がそんな難しい示唆に気づくわけではない。僕は首を傾げた。

「旅行ってこと？」

「違う。いっしょに遠くの土地で暮らすの」

「僕は高校生だよ？ 高校は卒業しないの？」

「うん」

「今どき高校も出ないで仕事は見つけれないし、僕らがそんなことをしたらすぐに創作願いを出されちゃうよ。違う？」

「ダメ？」

彼女はまだ僕を見ている。

「卒業って映画知ってる？」

「知らない」

彼女は首を横に振って答えた。

「古い映画なんだ。主人公は普通の大学生で、好きになった女性は近々結婚する。最初は諦めるんだけどいてもたってもいられなくなった結婚式当日、彼女がいる式場に向かうんだ。花嫁と花婿が永遠の愛を誓う寸前、主人公は彼女の名前を大声で叫んで、式に乱入して、花嫁になるはずだった彼女を連れ去る。要するに駈落ちだよ。白昼堂々とね。そして、二人は長距離バスに乗り込む。二人ともとてもニコニコしてたんだけど、次第に顔が険しくなるんだ。なぜだかわかる？」

「たぶん、不安なんですよ」

「おそろくね。僕はあの主人公のような勇氣はない」

「ねえ、その映画、続きはどうなったの？」

「長距離バスに乗り込んで不安な表情になって終わりだよ」

「じゃあ二人が幸せになったか、不幸せになったかわからないの？」

「さあ、わからない」

「私たちの場合は幸せになるかも」

「かもだろ？」

「世の中ほとんどかもじゃあない。確実なことは少ないよ」

確かにそうだ。

「もう少し考えよう」

僕は彼女の手を取った。

「冗談だよ」

彼女は急に明るく言った。冗談。達の悪いはずら。僕は一瞬頭にきたけど、すぐに可笑しくなってきた。彼女は演技派だ。

それから僕らは高校卒業まで付き合った。もちろん駈落ちはしていない。逃避行もしていない。ただ、駈落ちの話から僕らはギクシヤクし始めた。なぜか、本気になれないのだ。互いに近づこうと努力するが、まるでその努力と反比例するように、僕らの距離は縮まらなかった。普通に付き合いながら、高校を卒業したら別れるのだろうと思っていた。進路を決める時も互いの将来にはまったく言及せず、進路先を合わせるつもりも起きない。そして、僕は地元就職が決まり、彼女は都会の大学へ進学が決まった。

別れる日、僕は聞いた。

「いっしょに遠くへ行こうと言った時、本気だったの？」

「本気だったよ」

彼女は笑った。そして、静かに語った。

「私は君のことを知りたいと思ってた。でも、何もわからなかった」

彼女の付き合った感想。何もわからない。

雨は止む気配がない。家まであと少し。彼女は都会に出た。遠くへ行きたいという願いは適ったと判断すればいいのだろうか？ 違う。彼女が願った逃避行はこの土地にあるすべてを捨てて、違う場所に移り住むという行為自体だ。ただ都会に進学のために移り住むのではこの土地との関係を断ち切ってはいない。断ち切らねばならなかったのだ。僕はできない。今もできないだろう。彼女の結婚相手は断ち切ることができのだろうか。もう彼女は駈落ちなどと考えていないのだろうか。彼女は幸せなのだろうか。

僕にはわからない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9476t/>

---

卒業

2011年10月9日06時34分発行